

海と祈りのフォリー

計画敷地は平和記念公園内の霊域ゾーンに位置しており、沖縄戦の歴史を色濃く残す。
特に6月の慰霊の日には県内外から多くの来場者が訪れ
様々なルーツの人、それぞれの鎮魂の場として機能している。
慰霊塔エリアの先にあるこの休憩所は、**人々の憩いの場**であり
急な雨から身を守るとともに、誰もが**個々の想いを抱けるような場**でありたい。

摩文仁の丘を通り抜ける風と光、**南西の海へと開ける眺望を大切**にし
日射と雨をしのぐ素直な架構が利用者を迎え入れる。

湾曲した壁と屋根のシンプルな構造が、人々の**意識を自然と海へ導く**。
霊域ゾーンからの抜けを完全に区切るのではなく
園路の遠くからでも期待感を膨らませながら休憩所に足が向くような佇まいとした。

外壁はコンクリートの素体を見せ、**原始的で厳かな雰囲気**を大切にした。
新たに生まれる休憩所でありながら、その地に昔からある存在のように
この先の長い沖縄の歴史を紡ぐ。来場者の休憩所として愛され、周囲の霊域ゾーンと調和しながら
遠くから聞こえる波の音とともに**「命-対」を静かに感じる**ことができる。

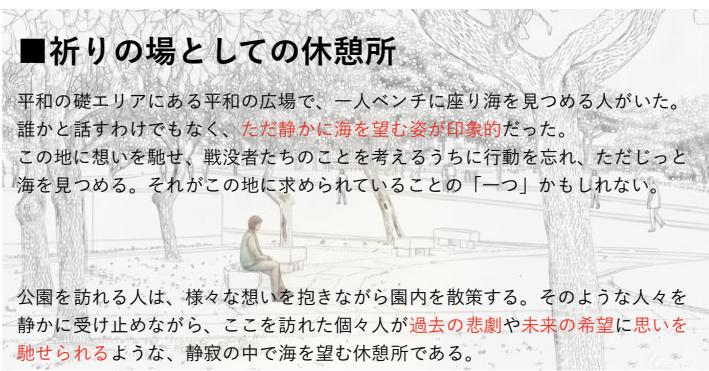
沖縄の雄大な風景と向き合いながら、戦没者へ思いを馳せることができる場所
そして歴史と向き合い今と未来を考えることができる場所を目指した。



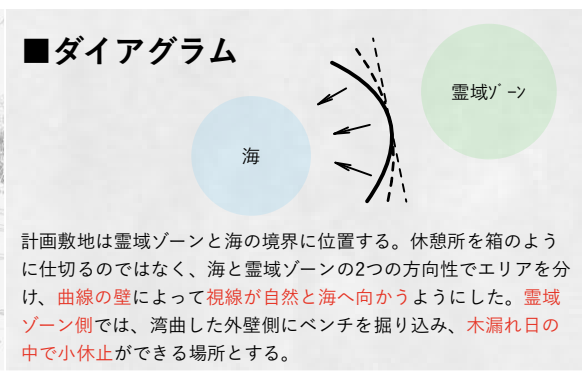
■祈りの場としての休憩所

平和の礎エリアにある平和の広場で、一人ベンチに座り海を見つめる人がいた。誰かと話すわけでもなく、**ただ静かに海を望む姿が印象的**だった。この地に想いを馳せ、戦没者たちのことを考えるうちに行動を忘れ、ただじっと海を見つめる。それがこの地に求められていることの「一つ」かもしれない。

公園を訪れる人は、様々な想いを抱きながら園内を散策する。そのような人々を静かに受け止めながら、ここを訪れた個人々が**過去の悲劇や未来の希望に思いを馳せられる**ような、静寂の中で海を望む休憩所である。



■ダイアグラム

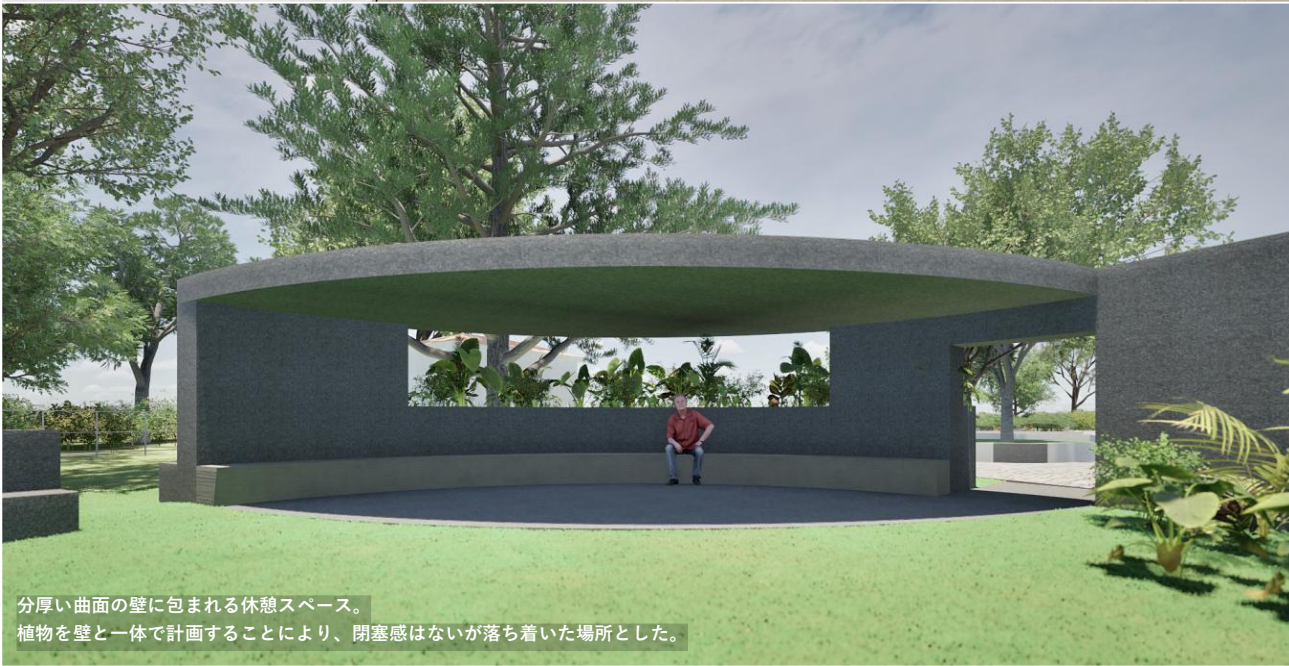
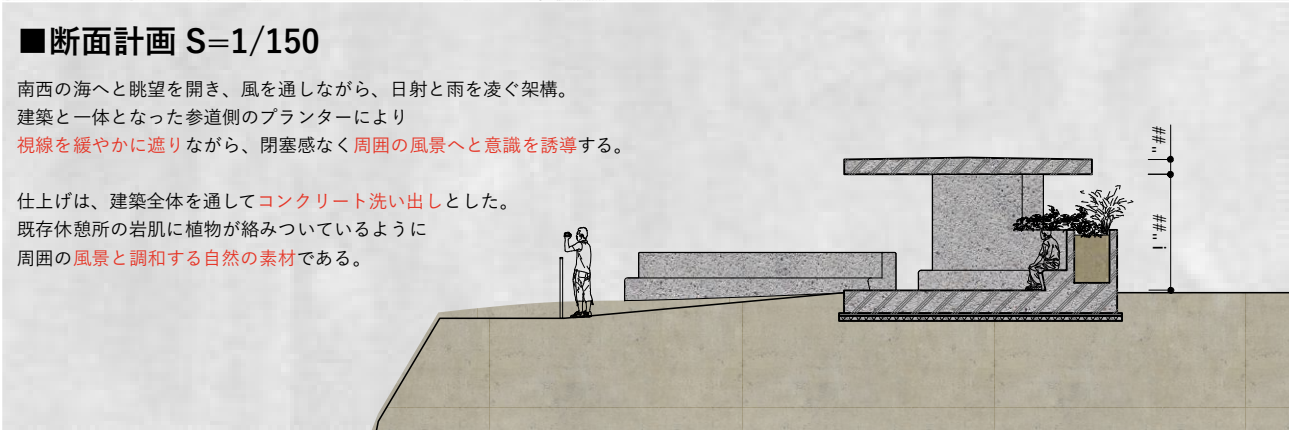


計画敷地は霊域ゾーンと海の境界に位置する。休憩所を箱のように仕切るのはなく、海と霊域ゾーンの2つの方向性でエリアを分け、**曲線の壁によって視線が自然と海へ向かう**ようにした。**霊域ゾーン側では**、湾曲した外壁側にベンチを掘り込み、**木漏れ日の中で小休止**ができる場所とする。

■断面計画 S=1/150

南西の海へと眺望を開き、風を通しながら、日射と雨を凌ぐ架構。建築と一体となった参道側のプランターにより**視線を緩やかに遮り**ながら、閉塞感なく**周囲の風景へと意識を誘導**する。

仕上げは、建築全体を通して**コンクリート洗い出し**とした。既存休憩所の岩肌に植物が絡みついているように周囲の**風景と調和する自然の素材**である。



分厚い曲面の壁に包まれる休憩スペース。植物を壁と一体で計画することにより、閉塞感はないが落ち着いた場所とした。



湾曲した壁とスラブが波の音を集め休憩所の人々に視覚、聴覚から海を伝える。人々の視線は自然と海へ向かい、背面は心地よく木々に包み込まれる。

■配置図兼平面図 S=1/150



西日を遮る
▽ 植栽と壁の配置

北側の丘を臨む
テーブル

木陰下のベンチ

トイレへの視線を回避する壁と植栽帯

寝転び空を見上げることもできる
ベンチ φ2400

海へと視線を誘導する
腰壁兼ベンチ

曲面の壁に包まれる
軒下空間

公園のスケールに合う
伸びやかなベンチ

R 6,230

壁芯の半径は
慰霊の日に因み6.23m

敷地に近づいてくると
開口の奥に海が見える

周囲の既存外構と
連続するアプローチ

休憩所の顔となる
プランター

悲しい記憶と美しさの両極を併せ持つ
沖縄の海を眺めながら
悲惨な過去や平和への希望に想いを馳せる

手摺の手前に
低木を植え風景を彩る

海や岩壁、木々など
雄大な自然を臨む

■建築概要

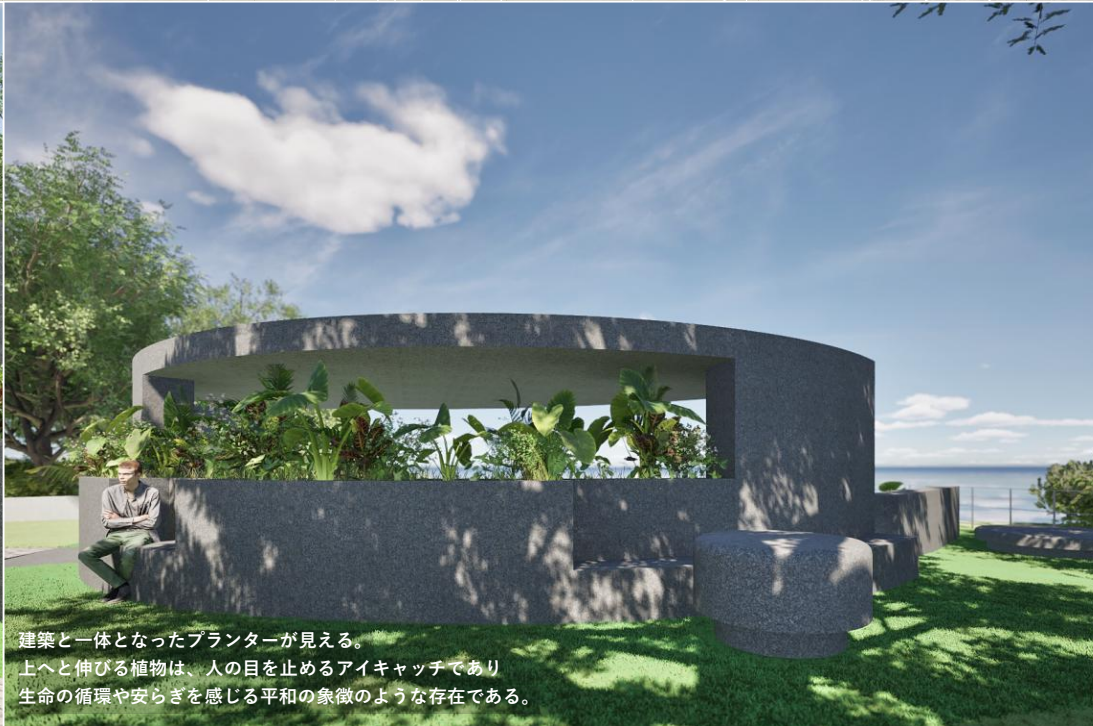
建築面積：35.22㎡

▽ 外壁/軒天/床：コンクリート洗い出し仕上げ

▽ 屋根：コンクリート金鍍押え



慰霊塔 園路側から見る。
まるで海を縁取るような入り口は、人々を自然と招き入れる。



建築と一体となったプランターが見える。
上へと伸びる植物は、人の目を止めるアイキャッチであり
生命の循環や安らぎを感じる平和の象徴のような存在である。